

研究主題「学びの構造転換『キャリア教育の推進』  
～すべての子どもが、なりたい自分になるために～」

キャリア教育を通して、ふじみ教室で身に付けさせたい力

【人間関係形成・社会形成能力】

相手や状況に応じて、自分の気持ちを伝えたり、意見を聞いて受け入れたりする。

【自己理解・自己管理能力】

自分の得意なことや苦手なことを知る。

【課題対応能力】

生活や学習で苦手なことに手立てを考えて取り組む。

【キャリアプランニング能力】

見通しをもって活動に取り組む。

### 1. 今年度の研究とキャリア目標との関わり

ふじみ教室に通室している児童はASD傾向やADHD傾向、LD傾向等があり、認知の特性に偏りが見られ社会性に課題があることが多い。そのため、学習が積み上がりにくい児童や得意な学習と苦手な学習の差が大きい児童が多い。そこでふじみ教室では認知の特性や発達段階を踏まえ3～6人のグループ学習と個別学習を組み合わせる指導を行っている。グループ指導では、SST（ソーシャルスキルトレーニング）、CST（コミュニケーションスキルトレーニング）、運動の3つの柱を軸にして通室児童の自己肯定感を育み自立に必要な基礎的な力を育てたいと考えている。

通室している児童の多くは、在籍学級の中で伝えることにおいて苦手さをもっている。自分の考えを言葉にするのが難しい、問われていることが分からずに答えがずれてしまう、感情を言語化できずに気持ちのコントロールをすることが苦手であることなどが課題として挙げられる。このような児童は学校生活の中で困り感もちながら学習していることが多く、上手い出来ないことが重なると自己肯定感の低下につながっていくため、ふじみ教室においてスモールステップで課題に取り組み、できたという経験を積み重ねている。

在籍学級での話し合いの場で通室児童が主体的に活動するためには、自分の気持ちや考えを言葉で伝えることや、相手の話を最後までしっかりと聞くこと、意見をまとめていくために、時には自分の考えを譲れるようになることも必要である。そのために、自分の意見を考えたり、分かりやすく発表したりする練習が重要になる。ふじみ教室の学習（SSTやCST）を通して自分の考えを相手に伝える力（土台）を育てることにより、キャリア教育目標の中の【人間関係形成・社会形成能力】に掲げている「相手や状況に応じて、自分の気持ちを伝えたり、意見を聞いて受け入れたりする。」を達成できるのではないかと考える。また、今年度は、課題を達成するために話し合うことで、【キャリアプランニング能力】に掲げている「見通しをもって活動に取り組む。」を達成できると考える。

自己理解・自己管理能力、課題対応能力のキャリア目標に関しても、日頃のグループ学習や個別学習の時間の中で、いろいろな学習を通して取り組んでいる。

「自分の得意なことや苦手なことを知る。」については、グループ学習の中で上手くできていること、

頑張っていることなどについて、授業者や担当教員が良かったところを伝えて評価することで、児童本人が気付いていなかった得意なことを知ることができるようにしている。

「生活や学習で苦手なことに手立てを考えて取り組む。」については、自分の得意なことや苦手なことが分かったあとに、苦手な部分をそのままにしておくのではなく、困ったときに周囲に手伝ってもらうための伝え方を練習することや、担当教員と相談をして自分に合った対策を考えて試してみることも取り組んでいる。

ふじみ教室で校内研究を始めてから今年で5年目になる。これまでCSTの中で、「リモコンロボット」「なぞのアパート」「どっちがいい」「無人島SOS」の授業を行い、研究を進めてきた。まず、必要な情報をきちんと相手に伝えることから始まり、昨年度はさらに研究を進めてグループでの話し合いに重きをおいた。昨年度は、話し合う際に折り合いをつけることはできたが、折り合いをつけることを大事にするあまり、話し合いが深まらなかったことが反省として挙げられた。そのため今年度は、達成の基準を設けたり役割分担を話し合ったりすることで、より具体的に話し合う必要性があるようにした。在籍学級では、上手に話し合うことが難しい児童も、ふじみ教室での学習を通して、実際の場面で学んだことを生かしていけるように支援し、「なりたい自分になる」ために必要な基礎的な力を身に付けさせたい。

## 2. 分科会の手立て

### ①構造化による支援

ふじみ教室に通室する児童は、状況把握が苦手で、曖昧なものの理解が難しい傾向が見られる。そのため、その日の流れや授業の内容などを構造化することにより、児童が聞いた内容を頭の中でイメージする際の手助けとなることをねらっている。具体的には、以下のような構造化に取り組んでいる。

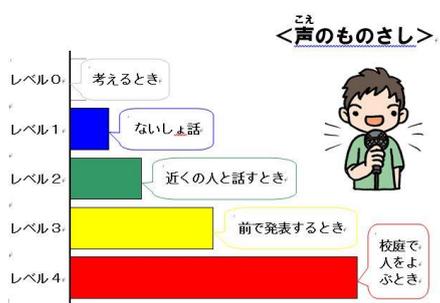
**生活の構造化**：その日の活動予定を、目に見えるように掲示する。

**空間の構造化**：グループ指導の場所、運動する場所、個別指導の場所など活動ごとに場所を分ける。

**時間の構造化**：授業の流れをはじめに提示して、見通しをもたせる。学習の流れの可視化。

**活動の構造化**：課題の取り組み方やルールについて提示する。

**指導の構造化**：始めにめあてを提示し、終わりにめあてについて振り返る流れで授業を計画したり、声の大きさの目安や、答えに困ったときの伝え方など、毎回同じ掲示物を活用したりすることでどの教員も共通の評価基準で指導している。



**おたすけ言葉**

- ☆ちょっと待ってください。
- ☆今、考え中です。
- ☆〇分だけ時間をください。
- ☆手伝ってください。
- ☆教えてください。
- ☆もう一度教えてください。
- ☆〇〇が分かりません。
- ☆〇〇ならできます。

いいですか。

### ②個別指導とグループ指導を組み合わせた指導形態

ふじみ教室では、個別指導とグループ指導を組み合わせて指導を行っている。個別指導では、認知の特性や障害特性に合った学習課題を個別に用意して指導を行う。グループ指導では、少人数の中で、友達の意見を聞きながら考えたり、友達に自分の意見を言葉で伝えたりするなど、児童同士の関わり合いを通して学ぶ活動を行う。2つの指導形態を組み合わせながら、児童の話す力、聞く力を伸ばしていくことをねらっている。

### ③CST や SST の学習の設定

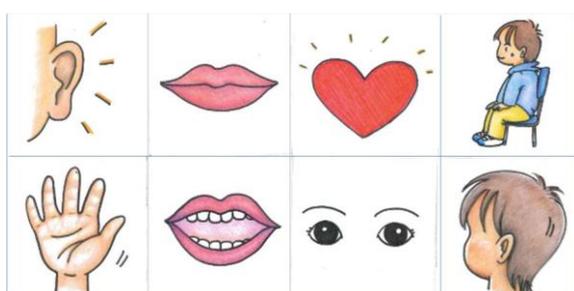
年間を通してCST（コミュニケーションスキルトレーニング）やSST（ソーシャルスキルトレーニング）の学習を年度当初から計画的に設定している。その際、児童の発達段階や課題の違いに留意している。CSTでは「ブラックボックス」、「どっちがいい」の学習等に取り組み、感覚（聴覚・触覚など）を言葉で表わす練習や言葉を使ってやりとりする練習をしている。また、SSTでは「こんなときどうする」や「気持ちのコントロール」の学習等を行い、自分も相手も気持ちよく過ごすための技能を獲得する練習を行っている。

#### ④環境調整

ふじみ教室に通室している児童は、気になる物が目の前にある、周囲が騒がしいなどの周りの環境や情報の影響によって集中の持続が難しい傾向がある。児童にとって聞き取りやすい環境の中で話したり聞いたりする練習ができるように環境調整をすることで、児童が安心して学習活動に参加できるように配慮している。例えば、不要なものを教室内に置かない（特に児童の視界に入る前方は最低限の掲示にする）ようにしたり、移動式パーティションを活用したりしている。

#### ⑤評価絵カードの活用

ふじみ教室では、学習に必要な基本的な態度を8つの絵カードで示している。絵カードは、はじめの会の中で、一人一人の目標を確認するときや、児童の学習態度の即時評価の手立てとして活用している。絵カードを提示して適切な態度を示すことは、視覚優位の児童に対して理解を促すために有効だと考える。



左上から順に、  
「聞く」「口閉じ」「気持ち・協力」「姿勢」  
「挙手・運動」「話す」「見る」「考える」

#### ⑥発表する場の意図的な設定

はじめの会では、日直の仕事を担当で行っている。声の大きさに気を付ける、丁寧な言葉遣いで話す、始めと終わりには礼をするなど、人前で話すときの基本的な型を学んで練習している。

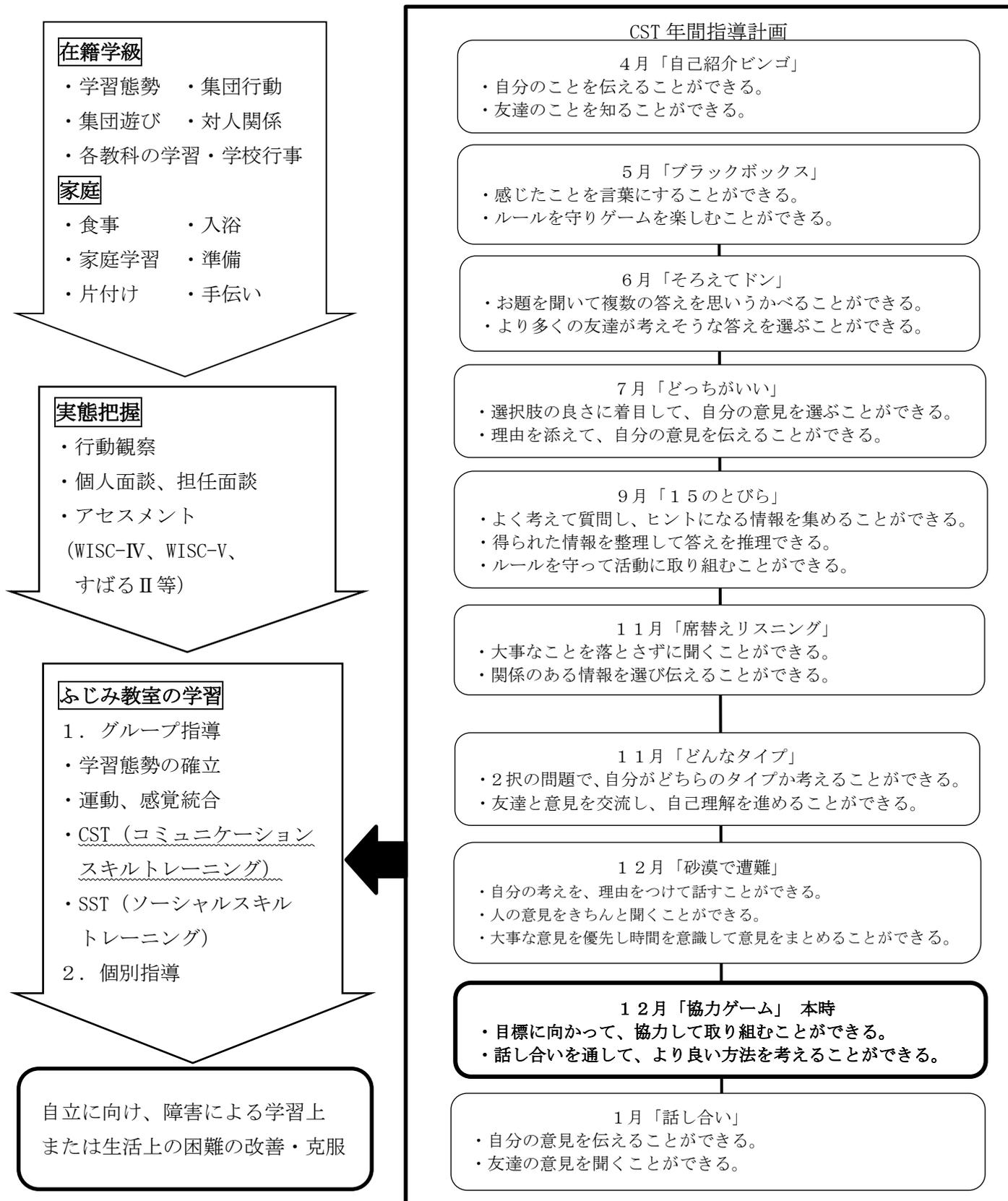
毎回のグループ指導の終わりには、その日の学習の振り返りを全員が発表する時間を設定し、発表する前には、授業前に決めためあてや学習内容を思い出させている。自分で考えをまとめて、文にして発表することが難しい児童もいるが、必要に応じて担当教員がサポートしながら、できる限り全員が発表する経験を積めるように配慮している。

3学期には、「ふじみ発表会」を予定している。内容や方法などを自由に考えて計画し、当日はグループ全体の前で発表する。相手を意識しながら話したり聞いたりすることをめあてにして、これまでの学習の成果を発揮する場として位置付けている。

### 3. 年間指導計画における本題材との関係

CST（コミュニケーションスキルトレーニング）とは、障害の特性や興味・関心の偏りによって、適切な方法で自分の意思を伝えたり、相手の意図を理解したりすることが難しい児童が、言葉を使って双方向のコミュニケーションが成立することを目指して、それに必要な基礎的能力を育てる学習活動である。

ふじみ教室では、児童一人一人の課題が違うため、個別指導計画をもとに、年間を通じグループ指導によりコミュニケーションスキルの獲得を図っている。



# 自立活動学習指導案

日 時:令和6年12月16日(月) 5校時

場 所:富士見丘小学校 多目的室1(2階)

学習者:第4学年男子〇名 第5学年男子〇名

授業者:〇〇〇〇

サブティーチャー:〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

## 1. 単元名 「協力ゲーム」

## 2. 単元の目標

- ・目標に向かって、協力して取り組むことができる。
- ・話し合いを通して、より良い方法を考えることができる。

## 3. 単元の評価基準

※単元のねらいに即する自立活動6区分の項目のみ表記

1健康の保持	2心理的な安定	3人間関係の形成	4環境の把握	5身体の動き	6コミュニケーション
					(2)相手の意図を受け止めたり、自分の考えを伝えたりするなど、言語を受容し表出することができる。 (5)場や相手の状況に応じて主体的にコミュニケーションを展開できる。

## 4. 単元について

### (1) 単元の内容

本単元は、『学習指導要領 自立活動編』「6 コミュニケーション」「(2) 言語の受容と表出に関する事」「(5) 状況に応じたコミュニケーションに関する事」によって構成されている。この項目は、対人関係を円滑にし、集団参加の基礎を培うという観点と、相手の意図を受け止めたり、自分の考えを伝えたりするなど、言語を受容し表出することができるようにするという観点から内容を示されている。

ふじみ教室では、年間を通じてCST(コミュニケーションスキルトレーニング)を設定し、他者との関わりの中で必要なコミュニケーションスキルの獲得を図る活動を行っている。

児童が、活動内容を十分に理解し、安心して学習に取り組むためには、スモールステップで学習を進めていくことが大切である。本時の学習の前に、1学期から様々な授業の中でペアやグループで話し合う機会を多く設けた。その中で意見を言いやすい雰囲気を作り、話形を提示することで意見の発表の仕方を学び、相手の意見を受け入れる練習も行ってきた。発表の順番を決めるなどの小さなことであっても、譲っ

たり結果を受け入れたりすることが難しい児童もいるため、児童同士で話し合っただけで決める機会を多くすることで、折り合いをつける練習にもなった。

今年度1学期は「自己紹介ビンゴ」で自分のことを伝える学習をした。「ブラックボックス」では、触った感じを言葉にする学習をした。感覚を言葉にしていくことは、感情を言葉にしていくことにつながると思われ、様々な感触のものを触って言語化した。また、人によって感じ方が違うことを知る機会にもなった。7月には「どっちがいい？」という、2択の問題について理由を伝えながら自己選択・自己決定の活動に取り組んだ。9月の「15のとびら」では、見えないお題に対して質問をしながら情報を集め、協力して正解を導き出す活動を行った。11月の「席替えリスニング」では、聞いた内容を基に正しい席順で動物を配置する活動に取り組んだ。「どんなタイプ？」は、「どっちがいい？」のような自己選択・自己決定だけでなく、自分の内面にも触れた内容を加えてそれを交流することで、自己理解や他者理解を進めていった。12月の「砂漠で遭難したら」では、遭難した砂漠で無事に生き延びるための道具をグループで話し合っただけで決定する活動を行った。クリアするための制限時間を設けることで、互いに折り合いを付けて話し合いをすることもねらいとした。

本単元「協力ゲーム」は、怪盗からのミッションという興味関心の向きやすい題材を用いて、グループで協力して課題のクリアを目指していく活動である。ミッションに取り組む中で、周りの雰囲気や相手に合わせたり、集団に参加するための手順や決まりを理解したりして行動することを学ばせたい。さらに、本単元を通して力を合わせて達成できた喜びを分かち合うことで、協力することの良さを感じることをねらっていく。そして、話し合いを通してよりよい方法を考えたり感情をコントロールしたりする力を養っていく。

## (2) 小集団グループの実態

4年生と5年生で今年度編成されたグループである。4年生と5年生はそれぞれ昨年度も同じ通室グループで、5年生は同じ在籍学級であり、お互いなじみのある関係性である。在籍学級での様子は、落ち着いて授業に参加することが難しく、些細なことでイライラしてしまい教室を飛び出してしまう児童や、自分の思いを言葉にすることが苦手で、周囲の児童とトラブルになってしまう児童がいる。また、気持ちのコントロールが苦手で、衝動的に行動したり状況に合わない発言をしたりする児童もいる。授業では姿勢保持が難しいため、立ち歩きや斜め座り、机に伏してしまうなどの様子も見られる。

ふじみ教室では、私語は多いが全員着席して穏やかにグループ学習ができていく。「風船バレー」や「犯人は踊る」などの遊びや運動の学習に積極的に参加し、言葉で説明するよりも体を動かして発散し、勝ち負けのある活動を好む様子が見られる。

これまでに「気持ちのコントロール」と「どんなタイプ？」の学習で、お互いの机を向き合わせて意見や理由を聞き合ったり、遊びを決める話し合いを経験したりしてきた。話し合いの司会的役割を教師がしていたが、「どんなタイプ？」では話型を示して児童同士で話し合いを進められるように促していった。

「席替えリスニング」では、互いに情報カードの内容を読み、友達から聞いた情報と自分の手持ちの情報とを関連づけてタイミング良く発表してカードを操作する個人作業の後、グループで協力する1つの作業を経験した。その過程で、全員が沈黙したり机に伏せていたりする姿も見られたが、顔を上げて友達の発言に関心を持って聞き反応できるようになってきた。「もう一度言ってください。」など確認する言葉も使えるようになった。「誰から言いますか？」「僕から言います。いいですか？」など自発的な声かけも出てきた。まだ話し合いとは直接関係のない言葉を発してしまうこともあるが、協力する意識を持って話し合いをしようとする様子が少しずつ見られるようになってきている。引き続き、授業の中で何をすれば良いか分かるように、めあてを確認することや担当と個別に相談することなどの支援を行いながら、自分の気持ちや考えを言葉で伝え、協力する活動に取り組んでいくことが必要である。

## 5. 授業の手立て

### ① 学習のめあての明確化

授業の初めに学習のめあてを提示し、その意義を説明する。これにより、授業を通して、どのような力が身に付くのかを理解し、意識して取り組むことができ、学習効果が高まると考える。めあてを提示する際には、言葉だけでなく、関連する内容の絵カードも合わせて掲示し、視覚的に分かりやすいようにする。

本時のめあては、「協力して取り組もう」「より良い方法を考えよう」である。協力することの意味や大切さを理解するとともに、協力するには分担、話し合い、声かけ、確認など必要な手順や方法があることを考えさせたい。

振り返りの発表では、自分はどのように取り組んだのか、活動を振り返り、考えをまとめて発表させる。学習の中での自分の活動の様子を振り返ることで、自分の頑張りや良さ、苦手さを感じることができ、自己理解につながると考える。

### ② 導入の工夫

本時は「怪盗 X からの挑戦状」が届き、X の指示に従って活動が進んでいく。学習のめあてとともに「大切な物を取り戻す」という児童にとっての目的意識を高めながら学習を進めていけるようにする。また、力を合わせてミッションを達成することで喜びを共有し、最後にもう一度暗号を解くことでさらなる達成感と協力することの良さを感じられるようにする。

### ③ 学習の流れの掲示

授業の冒頭で学習の流れを掲示し、活動内容を簡潔に説明することで、学習活動に見通しをもつことができ、落ち着いて学習に取り組むことができると考える。「怪盗 X からの挑戦状」に沿いながらも、通常の授業の流れを踏むことで、見通しをもって取り組めるようにする。

### ④ 提示の仕方の工夫

本時では、協力のための「話し合い」に重点を置いている。そのため、ゲームの説明や指示は必要最低限にとどめ、話し合う必要性を生み出していく。また、児童が主体的に話し合いに参加できるように話し合う内容についての板書をする、**話し合い**、**練習**、**確認** の手順を掲示することで何をすべきかが一目で分かるようにする。

### ⑤ 話し合いのポイント

本時では、話し合いの時のポイントについて確認する。自分の意見も友達の見解も大切にしながら、建設的な話し合いになるように支援する。また、自分の考えをきちんと伝えたりお互いに歩み寄ったりするためにも言葉遣いの大切さについて考えさせる。そして、話し合いで決まったことを全員で確認することが、気持ちのよいスタートと円滑な取り組みにつながることを押さえてから話し合いに取り組ませる。